# 効率とパワーのトレードオフ

### 大上由人

2024年8月18日

## エントロピー生成率の下限

熱浴のエントロピー生成率は、

$$\theta_{j\to k}(t) = \log\left(\frac{\omega_{j\to k}(t)}{\omega_{k\to j}(t)}\right)$$

$$= \log\left(\frac{R_{kj}(t)}{R_{jk}(t)}\right)$$
(1.1)

$$= \log \left( \frac{R_{kj}(t)}{R_{jk}(t)} \right) \tag{1.2}$$

である。このとき、熱浴と系の全エントロピー生成は、

$$\sigma(t) = \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} S(\mathbf{p})(t) + \left\langle \hat{\theta}(t) \right\rangle_t \tag{1.3}$$

である。ここで、 $S(\mathbf{p})$  は系のシャノンエントロピーであり、 $\left\langle \hat{ heta}(t) \right\rangle_t$  は時刻 t における熱浴のエン トロピー生成の期待値である。このとき、エントロピー生成の下限として、以下が知られている。

### Thm: エントロピー生成の下限 -

エントロピー生成率は、以下の不等式を満たす:

$$\sigma(t) \ge \sum_{j,k(j\ne k)} \frac{(R_{kj}(t)p_j(t) - R_{kj}(t)p_k(t))^2}{R_{kj}(t)p_j(t) + R_{jk}(t)p_k(t)} \ge 0$$
(1.4)

ただし、分子について、

$$j_{i\to k}(t) = R_{ki}(t)p_i(t) - R_{ki}(t)p_k(t)$$
(1.5)

である。

この式は、カレントが nonzero であるとき、エントロピー生成が nonzero になることを表して いる。

Prf

$$\frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t}S(\mathbf{p}(t)) = -\frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t}\sum_{k}^{\Omega}p_{k}(t)\log p_{k}(t) \tag{1.6}$$

$$= -\sum_{k}^{\Omega} \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} p_k(t) \log p_k(t) - \sum_{k}^{\Omega} p_k(t) \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \log p_k(t)$$
 (1.7)

$$= -\sum_{k}^{\Omega} \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} p_k(t) \log p_k(t) - \sum_{k}^{\Omega} \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} p_k(t)$$
 (1.8)

$$= -\sum_{k}^{\Omega} \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} p_k(t) \log p_k(t) \quad (: 規格化条件)$$
 (1.9)

$$= -\sum_{j,k}^{\Omega} R_{kj}(t)p_j(t)\log p_j(t)$$
(1.10)

$$= \sum_{j,k}^{\Omega} R_{kj}(t) p_j(t) \log \left( \frac{p_j(t)}{p_k(t)} \right) \quad (\because \sum_{k=0}^{\Omega} R_{kj}(t) = 0)$$
 (1.11)

である。また、

$$\left\langle \hat{\theta}(t) \right\rangle_t = \sum_{j,k(j \neq k)}^{\Omega} R_{kj}(t) p_j(t) \log \left( \frac{R_{kj}(t)}{R_{jk}(t)} \right) \tag{1.12}$$

$$= \sum_{j,k}^{\Omega} R_{kj}(t)p_j(t)\log\left(\frac{R_{kj}(t)p_j(t)}{R_{jk}(t)p_k(t)}\right) \quad (\because \log 1 = 0)$$

$$\tag{1.13}$$

である。これらを用いて、

$$\sigma(t) = \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} S(\mathbf{p}(t)) + \left\langle \hat{\theta}(t) \right\rangle_t \tag{1.14}$$

$$= \sum_{j,k}^{\Omega} R_{kj}(t) p_j(t) \log \left( \frac{R_{kj}(t) p_j(t)}{R_{jk}(t) p_k(t)} \right)$$

$$\tag{1.15}$$

$$= \sum_{j,k(j\neq k)}^{\Omega} R_{kj}(t) p_j(t) \log \left( \frac{R_{kj}(t) p_j(t)}{R_{jk}(t) p_k(t)} \right)$$
 (1.16)

$$=\frac{1}{2}\sum_{j,k(j\neq k)}^{\Omega}\left(R_{kj}(t)p_{j}(t)-R_{jk}(t)p_{k}(t)\right)\log\left(\frac{R_{kj}(t)p_{j}(t)}{R_{jk}(t)p_{k}(t)}\right) \quad (∵添え字に対する対称性)$$
(1.17)

$$\geq \sum_{j,k(j\neq k)}^{\Omega} \frac{(R_{kj}(t)p_j(t) - R_{jk}(t)p_k(t))^2}{2(R_{kj}(t)p_j(t) + R_{jk}(t)p_k(t))} \quad \left(\because \frac{1}{2}(a-b)\log(a/b) \geq \frac{(a-b)^2}{2(a+b)}\right)$$
(1.18)

である。よって示された。□

## 2 Improved Shiraishi-Saito inequality

 $g_{j\to k}(t)$  を、時刻 t における jump quantity とし、

$$g_{j\to k}(t) = -g_{k\to j}(t) \quad (j \neq k)$$
(2.1)

とする。このとき、以下の不等式が成立する。

#### Thm:Improved Shiraishi-Saito inequality

jump quantity の平均値は、以下の不等式を満たす:

$$|\langle \hat{g} \rangle_t| \le \sqrt{\sigma(t)\Xi_g(t)} \tag{2.2}$$

ただし、 $\sigma(t)$  はエントロピー生成率であり、 $\Xi_g(t)$  は、

$$\Xi_g(t) = \frac{1}{4} \sum_{j,k(j \neq k)}^{\Omega} (R_{kj}(t)p_j(t) + R_{jk}(t)p_k(t))g_{j \to k}(t)^2$$
(2.3)

である。

#### Prf

jump quantity の平均値は、

$$\langle \hat{g}(t) \rangle_t = \sum_{j,k(j \neq k)}^{\Omega} p_j(t) \omega_{j \to k}(t) g_{j \to k}(t)$$
(2.4)

$$= \sum_{j,k(j\neq k)}^{\Omega} R_{kj}(t)p_j(t)g_{j\to k}(t)$$
(2.5)

$$= \frac{1}{2} \sum_{j,k(j\neq k)}^{\Omega} (R_{kj}(t)p_j(t) - R_{jk}(t)p_k(t))g_{j\to k}(t)$$
(2.6)

$$=\frac{1}{2}\sum_{j,k(j\neq k)}^{\Omega}(R_{kj}(t)p_j(t)-R_{jk}(t)p_k(t))g_{j\to k}(t) \quad (∵ 添え字に対する対称性)$$
 (2.7)

$$= \frac{1}{2} \sum_{j,k(j\neq k)}^{\Omega} \frac{R_{kj}(t)p_j(t) - R_{jk}(t)p_k(t)}{\sqrt{R_{kj}(t)p_j(t) + R_{jk}(t)p_k(t)}} \sqrt{R_{kj}(t)p_j(t) + R_{jk}(t)p_k(t)} g_{j\to k}(t)$$
(2.8)

である。ここで、Cauchy-Schwarz の不等式を用いると、

$$|\langle \hat{g} \rangle_{t}| \leq \sqrt{\sum_{j,k(j \neq k)}^{\Omega} \frac{(R_{kj}(t)p_{j}(t) - R_{jk}(t)p_{k}(t))^{2}}{R_{kj}(t)p_{j}(t) + R_{jk}(t)p_{k}(t)}} \cdot \frac{1}{4} \sum_{j,k(j \neq k)}^{\Omega} (R_{kj}(t)p_{j}(t) + R_{jk}(t)p_{k}(t))g_{j \to k}(t)^{2}}$$
(2.9)

である。ここで、第一項は  $\sigma(t)$  である。第二項を  $\Xi_q(t)$  とすると、

$$|\langle \hat{g} \rangle_t| \le \sqrt{\sigma(t)\Xi_g(t)} \tag{2.10}$$

である。よって示された。□

この不等式を変形することで、

$$\sigma(t) \ge \frac{|\langle \hat{g} \rangle_t|^2}{\Xi_g(t)} \tag{2.11}$$

となる。これは、jump quantity の平均値が nonzero であるとき、エントロピー生成が nonzero になることを表している。

このとき、

$$\Xi_g(t) = \frac{1}{4} \sum_{j,k(j \neq k)}^{\Omega} (R_{kj}(t)p_j(t) + R_{jk}(t)p_k(t))g_{j \to k}(t)^2$$
(2.12)

$$= \frac{1}{2} \sum_{j,k(j\neq k)}^{\Omega} (R_{kj}(t)p_j(t))g_{j\to k}(t)^2$$
(2.13)

は一般には有限であることが知られている。とくに、jump quantity が有限かつ、escape rate が有限であるとき、すなわち、

$$|g_{j\to k}(t)| \le g_0, \quad \lambda_j \le \lambda_0 \tag{2.14}$$

であるとき、

$$\Xi_g(t) \le \frac{1}{2}g_0^2 \lambda_0 \tag{2.15}$$

である。

得られた不等式を変形すると、

$$\sigma(t) \ge \frac{|\langle \hat{g} \rangle_t|^2}{\Xi_g(t)} \tag{2.16}$$

である。これは、jump quantity の平均値が nonzero であるとき、エントロピー生成率が nonzero になることを表している。

また、時間平均をとることで、以下の不等式が成り立つことが知られている。

#### Thm:Improved Shiraishi-Saito inequality(時間平均)

jump quantity の時間平均値は、以下の不等式を満たす:

$$\overline{\Xi}_g^{-1} \left( \lim_{\tau \to \infty} \frac{1}{\tau} \int_0^{\tau} dt \, \langle \hat{g} \rangle_t \right)^2 \le \lim_{\tau \to \infty} \frac{1}{\tau} \int_0^{\tau} dt \, \left\langle \hat{\theta}_t \right\rangle_t \tag{2.17}$$

ただし、 $\overline{\Xi_a}$  は、

$$\overline{\Xi}_g = \lim_{\tau \to \infty} \frac{1}{\tau} \int_0^{\tau} dt \,\Xi_g(t) \tag{2.18}$$

である。

#### Prf

普通の Shiraishi-Saito 不等式より、

$$\langle \hat{g} \rangle_t \le \sqrt{\sigma(t)\Xi_g(t)}$$
 (2.19)

である。Cauchy-Schwarz の不等式より、

$$\frac{1}{\tau} \int_0^{\tau} dt \, \langle \hat{g}(t) \rangle_t \le \sqrt{\frac{1}{\tau} \int_0^{\tau} dt \, \sigma(t) \frac{1}{\tau} \int_0^{\tau} dt \, \Xi_g(t)}$$
 (2.20)

である。ところで、

$$\frac{1}{\tau} \int_0^{\tau} dt \, \langle \sigma(t) \rangle_t = \frac{1}{\tau} (S(\mathbf{p}(\tau)) - S(\mathbf{p}(0))) + \frac{1}{\tau} \int_0^{\tau} dt \, \langle \hat{\theta}(t) \rangle_t$$
 (2.21)

である。この右辺第一項は、 $\tau \to \infty$  で、 $S(\mathbf{p}(\tau)) - S(\mathbf{p}(0)) \to 0$  である。よって、

$$\frac{1}{\tau} \int_0^{\tau} dt \, \langle g(t) \rangle_t \le \sqrt{\lim_{\tau \to \infty} \frac{1}{\tau} \int_0^{\tau} dt \, \langle \theta(\hat{t}) \rangle_t \, \overline{\Xi}_g}$$
 (2.22)

である。よって示された。□

この不等式は、jump quantity の平均値が nonzero であるとき、(カレントが nonzero であるとき) 平均の (熱浴での) 散逸が nonzero になることを表している。

ここで、長時間平均により Shanon エントロピーの項が消えることは重要である。というのも、シャノンエントロピーを知るためには粒子のミクロな状態を知らなくてはならないが、実際問題それが難しいためである。

# 3 熱機関のパワーと効率のトレードオフ

設定

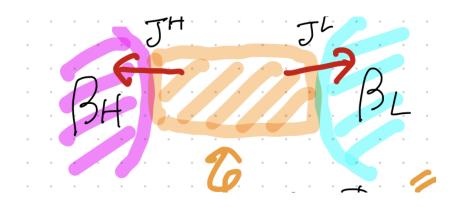


図1 設定

系が二つの熱浴に接触しているとする。 $\alpha=\mathrm{H,L}$  で、それぞれの熱浴の逆温度を  $\beta_{\alpha}$ 、遷移レートを  $\omega_{j\to k}(t)$ 、系のエネルギーを  $E_j(t)$  とする。このとき、局所詳細釣り合い条件は、

$$\log \frac{\omega_{j \to k}(t)}{\omega_{k \to j}(t)} = \beta_{\alpha(j,k)}(E_j(t) - E_k(t))$$
(3.1)

である。  $(\alpha(j,k) = H,L)$ 

熱浴への熱の流れは、

$$J_{j\to k}^{\alpha}(t) = \begin{cases} E_j(t) - E_k(t) & \alpha(j,k) = \alpha \\ 0 & \text{otherwise} \end{cases}$$
 (3.2)

である。また、エントロピー生成は、

$$\theta_{j\to k}(t)\beta_{\alpha(j,k)}(E_j(t) - E_k(t)) \tag{3.3}$$

$$= \beta_{\rm H} J_{j \to k}^{\rm H}(t) + \beta_{\rm L} J_{j \to k}^{\rm L}(t) \tag{3.4}$$

である。**仮定** 

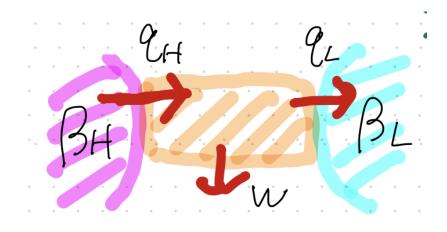


図2 仮定

以下の極限が存在し、その極限値が正であるとする:

$$q_H = -\lim_{\tau \to \infty} \frac{1}{\tau} \int_0^{\tau} dt \left\langle \hat{J}^H(t) \right\rangle_t > 0 \tag{3.5}$$

$$q_L = \lim_{\tau \to \infty} \frac{1}{\tau} \int_0^{\tau} dt \left\langle \hat{J}^L(t) \right\rangle_t > 0 \tag{3.6}$$

これは、高温熱浴から系に入ってくる熱流および、低温熱浴に流れる熱流の時間平均である。また、このとき、平均のパワー(仕事率)は、

$$W = q_H - q_L \tag{3.7}$$

であり、効率は、

$$\eta = \frac{W}{q_H} = 1 - \frac{q_L}{q_H} \tag{3.8}$$

である。このとき、以下の不等式が成立する。

Thm: 熱機関の、パワーと効率のトレードオフ・

熱機関のパワーと効率は、以下の不等式を満たす:

$$(q_H + q_L)^2 \le \overline{\Xi} \beta_L q_H (\eta_C - \eta)$$
(3.9)

 $\mathbf{Prf}$ 

今、

$$\lim_{\tau \to \infty} \frac{1}{\tau} \int_0^{\tau} dt \left\langle \hat{\theta}_t \right\rangle_t = -\beta_H q_H + \beta_L q_L \tag{3.10}$$

$$= -\beta_H q_H + \beta_L (q_H - W) \tag{3.11}$$

$$= \beta_L q_H \left( -\frac{\beta_H}{\beta_L} + 1 - \frac{W}{q_H} \right) \tag{3.12}$$

$$= \beta_L q_H(\eta_C - \eta) (\ge 0) \tag{3.13}$$

である。また、

$$g_{j\to k}(t) = \hat{J}_{j\to k}^L(t) - \hat{J}_{j\to k}^H(t)$$
 (3.14)

とする。このとき、Shiraishi-Saito 不等式より、

$$\left(\frac{1}{\tau} \int_{0}^{\tau} dt \left\langle \hat{g}(t) \right\rangle_{t}\right)^{2} \leq \overline{\Xi} \lim_{\tau \to \infty} \frac{1}{\tau} \int_{0}^{\tau} dt \left\langle \hat{\theta}_{t} \right\rangle_{t} \tag{3.15}$$

である。ここで、

$$\overline{\Xi} = \lim_{\tau \to \infty} \frac{1}{\tau} dt \frac{1}{2} \sum_{j,k(j \neq k)}^{\Omega} R_{kj}(t) p_j(t) (E_j(t) - E_k(t))^2$$
(3.16)

である。(これは、どれくらい active に熱のやり取りをするかを表している。) このとき、

$$\left(\frac{1}{\tau} \int_0^\tau dt \, \langle \hat{g}(t) \rangle_t \right)^2 = (q_H + q_L)^2 \tag{3.17}$$

である。よって、

$$(q_H + q_L)^2 \le \overline{\Xi} \beta_L q_H (\eta_C - \eta) \tag{3.18}$$

である。よって示された。□

上で得られた不等式を変形すると、

$$\overline{\Xi}\beta_L(\eta_C - \eta) \ge \frac{(q_H + q_L)^2}{q_H} \ge q_H + q_L \tag{3.19}$$

となる。これは、効率がカルノーサイクルに近づくと、 $q_H,q_L$  が 0 に近づくことを表している。このもとで、パワーは 0 に近づくことがわかる。

あるいは、以下のようにも変形できる:

$$W \le \overline{\Xi} \beta_L \frac{q_H}{(q_H + q_L)^2} (\eta_C - \eta) W \tag{3.20}$$

$$= \overline{\Xi} \beta_L \frac{q_H}{(q_H + q_L)^2} \eta(\eta_C - \eta) \quad (\because W = q_H \eta)$$
(3.21)

$$\leq \overline{\Xi}\beta_L \eta(\eta_C - \eta) \tag{3.22}$$

これは、効率がカルノーサイクルに近づくと、パワーが 0 に近づくことを直接的に示している。